

平成 20 年 7 月 23 日

各位

三井不動産レジデンシャル株式会社

(株)ジェイアール東日本企画「交通広告グランプリ 2008」  
企画部門に企業広告『すまいの風景』キャンペーンが最優秀部門賞を受賞

- 三井不動産レジデンシャル株式会社は、2007 年 7 月に実施した企業広告『すまいの風景』キャンペーンについて、(株)ジェイアール東日本企画主催の「交通広告グランプリ 2008」の企画部門最優秀部門賞を受賞しました。
  - 『すまいの風景』キャンペーンは、2007 年 7 月～12 月の期間中に弊社分譲物件を素材として、テレビコマーシャル、ラジオコマーシャル、屋外広告、交通広告等のメディアで展開したものです。本キャンペーンはひとつひとつのすまいが見せる「豊かな表情」、「美しい佇まい」、そして、そこにすむ人だけが見ることのできる「すまいの風景」を、写真家・上田義彦氏撮影の映像と写真で切り取り、1 人称で表現しました。今般このうち交通広告が同賞の受賞となりました。
  - 『すまいの風景』キャンペーンを含む、同賞の受賞作品は、下記の日程で展示・掲出される予定です。
    - ・ 「交通広告グランプリ 2008」受賞作品展  
場所：東京駅丸の内通路「アートロード」  
期間：8 月 2 日（土）～8 月 30 日（日）
    - ・ AD トレイン「交通広告グランプリ 2008 号」  
路線：山手線  
期間：8 月 2 日（土）～8 月 15 日（金）
- ※ 上記展示作品展の詳細は、下記連絡先にお問い合わせください。  
(株)ジェイアール東日本企画 交通媒体局内「交通グランプリ」事務局  
ご担当者：小柴様、須田様 TEL：03-5447-7880
- 当社が展開している企業広告は下記ホームページでご覧いただくことができますので、是非この機会にご利用ください。  
当社ホームページ：<http://www.mfr.co.jp/>

以上

<添付資料>

【交通広告グランプリ 2008 企画部門受賞概要】

応募作品名：『すまいの風景』

広告主：三井不動産レジデンシャル株式会社

フォトグラファー：上田義彦

クリエイティブディレクター：村田 徹

アートディレクター：丸田 昌哉

コピーライター：井口 雄大

<窓上広告>





すまいの風景 第二話



あなたのすまいに、  
あなたの好きな風景はありますか。

「週末は何してるんですか？」  
なんて聞かないでほしい。と女は思った。  
掃除、洗濯、買い物、散歩…  
何もしてないわけではない。  
けれど、とりたてて。  
「何をしている」というほどでもない。  
「んー、何してるのかなー」  
意味な話をしているうちに、別の話題になった。  
もしかしたら、  
つまらない女だと思われたかもしれない。  
そんな空想の後のことを、  
女は思い出していた。  
何も無い週末の午後、  
リビングのソファに横たわって、  
水筒に反射した光が、  
壁にゆらゆらと揺れながら、  
あと1時間もすれば、太陽は沈み始める。  
洗濯物は、とくに乾いているだろう。  
夏の日差しを浴び込んだ肌は、  
ふかふかになっていることだろう。  
でも、いま、動く気にはなれない。  
いつそう深く、女はソファに体を沈めた。  
そして、そういえば、  
先週末もこうしていたな、と思った。  
まぶたを閉じると、  
まもなく風がやってきました。



すまいの風景 第三話



窓を開けたとき、  
聞こえてくる音は何か。  
そんなすまいの選び方もある。

それまでの人生はいつも、  
エアコンの室外機の  
うるうるような低音と共にあった。  
豊田市区域。  
3年前から、男は、ここで暮らすようになった。  
都心を離れるのは不安だった。  
でも、少し距離を置きたくなって、  
結婚して、子どもが生まれた。  
そういうタイミングだったのかもしれない。  
決め手になったのは、  
家の前にある400mを越えるケヤキ並木だ。  
およそ5m間隔で伸びたつ  
その一本一本は、すべての部屋に  
木陰をつくるために植えられている。  
言わねばすべての部屋に、  
天然のカーテンがついている。  
窓を開けると、  
風がそれらを揺らす音が聞こえる。  
大きすぎもせず、小さすぎもせず。  
耳に心地よいボリュームで、  
今日はエアコンを  
つけなくていいかもしれない。  
風は音がな  
けれど、風は葉がに  
音を奏でてもう少しかたでできる。  
そのことに気づけただけでも、  
ここに居てよかったです、と思う。



すまいの風景 第四話



人は歳を重ねるほど  
魅力的になる。  
すまいも、そうならないだろうか。

20年前、ここで暮らし始めたとき、  
不動産会社の帳れ込み通り、  
そこには立派な森が広がっていた。  
横浜市区域。  
敷地の75%が緑地。  
確かに家の周りは緑であふれていた。  
けれど、その緑地の一つは、  
借り物のように、どこかごちゃごちゃい顔をしていた。  
そこにすまいはじめた。  
何百世帯もの家族たちのように、  
「あの頃は、新築ハイでしたからね」  
と隣人は懐かしそうに言った。  
新しい家と生活に、誰もが歩き足立っていた。  
人生でいちばん大きな買い物だから、  
それは当然だと思おう。  
今思えば、後悔は元氣過ぎた。  
笑顔は明る過ぎたけれど、  
それは、それで楽しかった。  
20年経って、毎日の風景はずいぶん変わった。  
木々は年中に深く影を伸ばし、  
その影をすまいに伸ばした。  
私たちは本当の大人になった。  
隣人はこんなことも言った。  
「いいすまいは、いいワインに、似ている」  
壁がワイン愛好家と知ったのは、  
実は最近だ。



すまいの風景 第五話



家までの帰り道も、  
すまいの一部だと思おう。

考えれば考えればほど、  
ネガティブなことかと思いつかないときがある。  
入社して6年目。  
以前より大きな責任を任せられるようになり、  
それがプレッシャーになっていた。  
どんなに頑張っても結果がついてこなかった。  
その日も、終わらなかつた仕事を  
期に間に、会社を出た。  
すると大通りに出たところで声をかけられた。  
「まるで昔に帰るような顔だね」  
昔はは減多に口を利かない先輩だった。  
先輩は楽しそうに話した。  
自分はこれから帰る「天国」について。  
その途中にある大きなケヤキ並木や、  
公園のベンチに横たわっている猫の人影や、  
一度こそそり落つた、  
ひどく苦かったポンカンの本について。  
まるで自分のものであるかのように。  
別れ際に、彼はもう一言。  
「仕事は持ち帰っても、不幸は持ち帰るなよ」  
そして、手を振りながら、  
遠くホームの階段へ消えて行った。  
私の帰り道にも何かあるんだらうか。  
さつと何かあるんだらうか。  
少なくとも不幸な顔さえしていなければ、  
さつと何かが見つかるとだらうか。  
そんな気がした。



すまいの風景 第五話



すまいを選ぶことは、  
毎日のはじまりと終わりを  
選ぶこと。

できることから死ぬまで、  
人生を保管しておくきたい。  
そう、男は思っていた。

受験、就職、結婚、eレシー。

人生の節目と呼ばれるものは、

自分の可能性を決めるものではない。

以前の自分はそう思うことができなかった。

だから、そのすべてを拒否していた。

もちろん家を買う勇氣もなかった。

もしも家を買ったら、ふとした瞬間に、

自分はこう思ってしまう気がする。

俺の人生は、こんなにつげなまなのだ。

そして、ローンを返し終わる前に、

きつとそこで逃げ出したくなる。

20代の頃は、何故あんなにも

迷なだつたのだろう。

スクライを覗めながら、男は苦笑した。

きつと自信がなくなったのだろう。

何をしたいのかも

よくわからなかったのだろう。

実際、家を手に入れた代わりに、

失ったものがあつたのだろう。

一足先に眠りについたら

妻の横顔を見つめながら、男は思った。

自分は最高のベイスキャンパスを手に入れた。

明日は、ここから、どこへこう。

三井不動産レジデンシャル

すまいの風景 第六話



本当の品質は、  
日々の生活の中で、  
何気なく感じるものかもしれない。

理想のチエーストは、この世に存在しない。

夫と私は、そうあきらめかけていた。

見つけたのは、

たまたま家族で出かけた日だった。

学生の頃、妻とよくデートした駅。

ランチを食べた後、散歩してると、

通りを通じた家具屋のショーウィンドーの中に、

それは何気ない顔をして存在していた。

目に入った瞬間、「あ」と思った。

あの度重なる家族会議はなんだったのだろう。

ときには増幅になりそうなくらい。

その色や、形や、大きさや、素材がどうあるべきか、

真剣に話し合つたのに。

夫も私も賛論はなかった。

しかし、それはチエーストではなく机だった。

実際、家に運び込むと、

それはチエーストを置くはずだった場所に

ぴたりと収まった。そこが元から、

自分が存在すべき場所であつたかのように。

明るさと重厚さを兼ね備えた絶妙なこげ茶色は、

真鍮に上質で、程よくカジュアルで、

既製全体に調和と落ち着きをもたらしていた。

それまで居間に散らかつていた雑貨を、

げんざその体に詰め込んで、

真ん中のは、私たち夫婦である。

けれど、なぜ、それを選んだのか。

いまもつて私たちは説明することができない。

三井不動産レジデンシャル

すまいの風景 第七話



「どこまで機能的にできたか」は、  
「どこまで美しくできたか」でわかる。

もしも毎日つくっていたなら、

君の料理はもっとおいしいんだろうね。

と恋人は言った。

いつものように、言葉も重厚なく、

他の女の子なら、きつと泣いていただろう。

確かにもつと言い方はあるだろう。

仕事を終えて疲れた体で、

コンビニやレトルトや外食の誘惑にも負けず、

精一杯愛情を込めてつくつたのだ。

けれど、良くも悪くも、

そんな彼の言い方に私は慣れていた。

そして、「そうだよなあ」と聞いていた。

私の料理は主張しすぎていた。

いろんなレシピまで

母から習つた調理の仕方や味付けは

ひとつも間違っていないけれど、

同じものを母がつくつたら、

ちつと角がとれて、まあるい味で、

さりげない盛りつけが、

真直に美味しいと思わせる。

そんな夕飯になっていただろう。

私じゃなくて、

ちゃんと料理が主役になっていただろう。

食べ終えた食後は、湯が流すてくれた。

学生時代ずっと、

小料理屋で働いていた後の後ろ姿は、

誰かに無理や無駄がなく、美しく、

それが私には、小僧たららしかつた。

三井不動産レジデンシャル

<新B額面>



すまいを選ぶことは、毎日のはじまりと終わりを選ぶこと。

港区白金台 2006年竣工

すまいとくらしの未来へ  
三井不動産レジデンシャル  
Mitsui Fudosan Residential

たとえば、朝、真っ暗な寝室に少しずつ差し込んでくる光。  
穏やかな午後のリビング。  
すべてを包み込んでくれそうな大きなひだまり。  
季節の移ろいを感じさせる、家前の並木道。  
ひとつひとつのすまいが見せる豊かな表情。美しいたすまい。  
それは、そこにすむ人だけが見ることのできる、すまいの風景。

そのようなすまいの風景から、人はスペックや機能を超えたクオリティを感じる。  
その空間だけが持つ「品」とか「空気感」といったものを感じ取る。  
そのすまいが、自分のものであるということに、大いなる誇りと幸福感を覚える。  
そんなすまいの風景があれば、きっと人は、そこで幸せになれる。

人々のくらしを思い浮かべる想像力で、  
そこから新しいマンションをカタチにする構想力で、  
そこにたくさんのうれしさを届ける発想力で、  
それを確かな品質で実現するこだわりの力で、  
私たちが手がける、ひとつひとつのすまいに、  
あなたの好きな風景がありますように。

すまいとくらしの未来へ  
三井不動産レジデンシャル



あなたのすまいに、あなたの好きな風景はありますか。

清水白塗台 2006年竣工

すまいとくらしの未来へ  
三井不動産レジデンシャル  
東京都港区新橋一丁目1番1号 三井不動産レジデンシャルビル 100-0002

たとえば、朝、真っ暗な寝室に少しずつ差し込んでくる光。  
穏やかな午後のリビング。  
すべてを包み込んでくれそうな大きなひだまり。  
季節の移ろいを感じさせる、家の前の並木道。  
ひとつひとつのすまいが見せる豊かな表情。美しいたすまい。  
それは、そこにすむ人だけが見ることができる、すまいの風景。

そのようなすまいの風景から、人はスペックや機能を超えたクオリティを感じる。  
その空間だけが持つ「品」とか「空気感」といったものを感じ取る。  
そのすまいが、自分のものであるということに、大いなる誇りと幸福感を感じる。  
そんなすまいの風景があれば、きっと人は、そこで幸せになれる。

人々のくらしを思い浮かべる想像力で、  
そこから新しいマンションをカタチにする構想力で、  
そこにたくさんのうれしさを届ける発想力で、  
それを確かな品質で実現するこだわりの力で、  
私たちが手がける、ひとつひとつのすまいに、  
あなたの好きな風景がありますように。

すまいとくらしの未来へ  
三井不動産レジデンシャル

< 出稿風景 >

